

常山紀談

十

函番號	21	號
種別	國	
種別	32.12	號
購入日	月	日

919.5
338
Vol.10



常山紀談卷之十目次

一 馬場重以武功の事

一 利家白雲の琵琶を種村よ子へらるる事

一 秦桐若勇威比事

一 澤村大學朱柄の鎗を拵らるる事

一 加藤清正天草比一揆退治の事

一 森本義大夫組討功者の事

一 朝鮮陣の時 東照宮御遠慮の事

一 伊達家比士卒異風出陣の事

一 朝鮮南大門合戦 附 後向の備比事

一 國富源右衛門組討の事

一 加藤光泰大言の事

一 吉田又助川中を積る事

一 清正虎を狩りし事

一 清正船を取せし事

一 太閤名護屋より大言の事

一 菅政利後藤基次虎を斬る事 附 羅山先生南山銘の事

一 泗川の城を狭間を切る時の事

一 加藤嘉明拔懸高名の事

一 浅野長政諫言の事

一 井口与市主従功名此事

一 清正の武備厳重なりし事

一 朝鮮より虎と象とを渡す事

一 清正の士卒土穴に住し事

一 森本庄林黒白鳥毛の鎧靴此事

一 清正の花押筆畫多かりし事

一 後藤基次亀甲の車を造る事

一 和寧館合戦栗山利安武功用意の事

一 栗山利安儉約の事 附 日根野備中守黒田家より銀を返

一 事

直家花房又七近藤五郎左衛門一説は六郎左衛門星野十郎を大将として
戸名を攻二郎四郎白岡の腰ざし指く一の城戸口小出近藤見
ていく引進むと詞をかくる小次郎四郎軍場は臨て引と云
るやあつといひも終らぬ小花房星野とも手利の射もせて只
取速し是を射る花房が矢ハ中指はあつり星野が矢ハ次郎四郎
が持てる楯をわくもたやで射貫く次郎四郎おとせ敵を
追拂ひく歸まらり天文十七年赤坂郡鳥取の砦を大和守攻
る、軍陣の近藤四郎徳の口を崑深し射せ二町計引退くれ
るよ味方は泉菅坊といふ山伏来て其矢を抜バ足なへて歩む
事あつともば大和守のちるも来て二三町引退きまらりしうも
馬をたしてまじバ味方も隔りぬ敵追うけ来バ付死せんと

おりの時妹婿なりし片山彦三郎といふ者の弟来て馬抱棄
せしる血鎧を越く流し朱も成きしを敵見て涼し負し
あつたなりたもバ十文字の鎧を延べ頼よかや後さへんとす
る事幾度といふをちるに漸し遁まらぬと歸まらり首を取
て見るとまてんといふ諺も六此時あつるといふ近藤四郎常
よとまらるとちるり是十七歳のころ之後近藤四郎直家よを公し
与力六十人付まらり義作三星の城ハ浦上宗景よあるの共
ちやまらちるを安藝此毛利家よの附城を據へ三村
家親大将とてな合戦あり直家より馬場を加勢し
く三星よをたつり場愛宕精進まらるとして五月廿四日
ま流まらりて身を清むる事不敵あつりといふ直よは向へバ

三星ミツホシよりも鎧ヤリ捲マキく士一人来て馬場ウマバに並び進む敵を退オシはす
ま六附城ツツノロよりおとくを助け城シロ入門内イロノウチをらんま八混曹ハツマシラの兵
十四五人折マギあぐ鎧ヤリの先サキを並ナリ待マツりけり静シズ々と引ヒキとて宗ムネ
景感状キョウカンジョウを懸ケへら直家ナホカ夫トシより重オモみと名ナを改カめさせ家の字イ
をやれり備前上道郡ビゼンノウミチノ妙禅寺ミョウゼンジの岩イハけ合戦アヒケンは重オモみ六刀敵ムツタチノハ
鎧ヤリもお救タメひ溝ミヅを飛越トビコエて敵テキのまは下にぐり入イんとせし不
躑フキてうづり伏フシり敵テキ勇イサまかりてわのあを突ツとぐり行ユク
りやうをつと立上タチアり切伏キリセく首カビをえ同郡ツチノ土田ツチノの軍イクサあも長六尺ナガムシ
よ備ビまゝ梶井カキヰといひ兵ヘイを討取ウチトルくを角南ツノミ惣ソウ菴アンといひ白シロき浴衣ユカタ
をえ右ミダの肩カミをえぬぎ太刀タチ折ヲりきり兵ヘイのまはじり午ウマ
慶ケイかどやかヤカくもあんと終オドロりつりといふ則スナハち水ミヅ禄ロク

十年五月十日土田ツチノの上ノ蟹目カニメの軍イクサ小敵コテキ五人鎧ヤリを横ヨコへ山のす
えまゝとをみ八坂ヤタカお下シりまゝ一人射倒イタフりきりい
つらべ引ヒキとて時山トキヤマの腰コシを引退ヒキく味方ミカタ敵テキ追詰オヒツメて既スデに討ウチとぬ
ぞくえゆればなり合アヒせ敵テキを切キり味方ミカタを助タメひく取トルて
備前岡山ビゼンノオカヤマの城主シロノリ金光キョウミツ与次郎ヨジロウを直家ナホカ謀マカを以モて殺コロし城シロを取トル得エる
まゝも近チカきをうり敵テキ多オホたれば戸川トガハ平ヘイ右ミダを城番シロバシとす
小寄務コヨリキ六十人ムソウニヒトを召メりて直家ナホカ告ツケぐゆいし重オモみうも
細コうろべきといふ直家ナホカ告ツケぐゆいし重オモみうも
六十人ムソウニヒト一人も辞退ジタイとす老オホをよ戸川トガハが力チカラもたはちされて
重オモみ加勢カセなりとわいし戸川トガハ馬場ウマバ三年サンネン岡山オカヤマあり
美作ミササキ三サンの宮ミヤ此ココ城シロを直家ナホカ一時イツキ攻セらるる時城主トキノシロノリ村上ムラカミおを衛ウ士シ

卒六十人計より突て出る重介先進み鎗武者四人薙刀
武者四人と戦ひて城門の隙より追討せし敵鎗を投突よと
を奪ひて歸る高城より軍小直家守を谷の受
とて敵来しとれば谷より上り山此半小鉄炮を五段射て
待かけしとて不初かたり三段追崩れ四段より持し注炮
小右の膝より臂へかけく打透さし敵声をかこれバ重介中ら
どとわくく四段をも追きし山崩れし出るあり小曹の鎧
を傾け奔流く待し不柴折かけし谷の向よりお注炮
脊割具足の右に肩かひく骨の内より臂やで打貫き目暗
そりり氣を驚めて足下田中藤分間近くおれり重介田
中を呼りけ大事の手負ぬ此所を退んとせば追討し連人衆

を死所とせんといふ處に我一支もさしといふ重介五間をり
歩きて即等の肩小をかけ勢不退くを敵慕ひ来しとて重介
鎗を合せ追退て歸まり鉄炮の中より射大木を以て袋を突
通しめめく見え物の色目分き只紅白の花のちよんちよん
アと後より後りとなり備前児嶋八濱より軍を浮田七郎
兵衛忠家の子と太郎大おとて戸川平右衛門岡平内巳下
渡海し麥飯山の敵城をとりしとて草を薙し敵かく追
きしとて与太郎馬小輪をかけく味方の兵を求る所は鉄炮肉
曹小中アとてさし落つ中村宗久同く討死し重介を
射られ急放し歩立よぬ月毛馬葦毛馬黒馬よ乗し
敵三騎重介を自れりけく馬を奪お寄る重介敵よりを奪か

けらまじと鎗の鉞を後ふたりと照は狭く静々と退く疲
まはりの討死よと名ひくふ敵引く助はぬ戸川見て今
日の働ゆ志我一命を継ぐると重みを譽まじく如小寺尾孫
四郎今日八重介を名だといふ重介先よてんがらう後あ
見ざらう一番進まじく敵の馬此毛色物具はいくよと問ひ
孫四郎赤面して顔なり重介吾滄然と弓をもちて後の能ふ
立ちまよと云て敵一人射倒しまじる人ありといふ鷹見侍も
進も知て某とていひきとり中納言秀家大坂より備前
下らう時雨中の徒然よ浮田修理因太郎左衛門花房又七三
人を呼ぶ軍ののぐらり此時前代の鎗柱功の継まじるハ
ぞと問ひ小馬場重介幸和織部寺尾孫四郎三人と答ふ

秀家聞て幸和寺尾ハ武功ハ有るも軽薄なりといふ
とても重介が人小越まじきとていふつまじき重介は
勝まじいもんあることいそれらば三人重介が武功ハ小言
衆もいひつれといふ重介真実を諳りて城下の近きまじり
引込て此の耕作してあるまじりて秀家聞て三百石加禄
の折紙を戸川肥後をもて重介と手へらういふまじりてむ
事達せむ重介をまじき心あてて遂よ秀家ゆも仕
つじ七十七まじく病死して士ハ仮初めもまじりてる心有べり
まじりて吾数度の戦場不修まじりて百死の中よ一生を得まじ
斯全く終りぬまじりて迷言しありまじりて池田家よ仕へり
種村小月稚ちハりや柴田家まじりて譽まじりて後招くまじりて人多
十五

かりりまゝに仕へて前田利家惣に迎へらまゝに
利家種村が琵琶を彈するを好むと聞く白雲といふ
名物の琵琶を贈らまゝに其志をや引かさん利家仕
へて佐々成政と頼朝日山の合戦は目を驚かす功名を遂
げ其後浅形長晟は奉公して彼白雲の琵琶は今浅形家
にありとや

○黒田家の士小森桐若と小剛の考を唐国扇長と一丈舟
もあつと指物みくも敵見知てをば或時さし扱を
がくて近々と敵を不意に出せば敵大に驚かして引退き
るわゝの考ありとや

○駿河を攻らむ時 東照宮様目の人を召しひりし

皆朱の鎗は柄瑠璃の柄と茂功徳まゝの考ありてハおせ
がはよ近比ハ持たしりの数多ありとまゝに分得ていふ
かゝり改めよと仰せたまふ皆朱は柄は鎗持せ昔浦草
の考もち付を急ぎ通る考を誰ぞと問ふ細川越中ちづ士
澤村大學と答ふ此よと申すにバ 東照宮様大學
ハ若た時オハといひつゝが小牧よその事なりし秀吉ニを惶
の軍兵を引た時秀吉六万計青塚に陣せしを吾小牧よ
に押寄て引退く敵を打破るや時細川忠貞ハ秀吉の先
陣はまゝにオハ先に進めて鎗を合せしを後今代目
の前はまゝに引たる覺えたりかゝる大別の考は持てし
とて其考の考を禁むる事よと仰せられしバ澤村傳へ

○清正一揆を攻了時或夜森本義孝入清正の前より軍評定
せし不允組討ハ力小よむ心剛まてまきくたまは易き物
かりとちりて清正組打ハ危きもの之勇は矯る時ハ必仕損
る一と戒められぬ其翌日清正の高先小森本馬と進る越小
歩行武者一人寄合まり森本聞ゆる馬の上手なきは敵
を抜きはふあてひしりと飛下り立上るとする敵を引
組て長く首をとる清正向ひ夕終やせし不達ひゆとい
へば清正大に賞せられり

○東照宮江戸はなをりやせし秀吉の使来して朝鮮を伐
るよりちりて斯く一人書院におしりやして深く思案の
体よりえさせまひる時本多正信御前近くおきまじり

御討もたしや有く正信殿ハ朝鮮小渡海をめぐりやと
せしも然黙然とせさせまを郭りあり三度よ及て後
何るぞかりまきる人や聞へき箱根をバ惟小守らすべき
と仰ありらば正信さてハよく御思慮定まらるるふとて
て退出しり

○朝鮮を伐る時関東の諸將も兵をゆさる伊達政宗と
遠國より不騎兵二十騎鉄炮百挺鎗百本と軍配を定
めしきく不千計は士卒を引具し天正十九年正月九日岩
出山を打立二月十三日京に着小西加藤ハ先陣まりり岐阜中
納言秀信を始りて関東に諸將師をゆさる其まは聚
楽より度橋を大宮小押通る政宗の旗三十本緋地は金の丸

軍小取巻トナリききムナくくムナ討死あムナん事口怪クチヲシくムナ只疾都城小入
て日本の軍イナ先陣センゼンせムナれムナとたムナりムナ隆景タカノリさムナ六日
本先陣ハ隆景仕らムナずムナて人小先陣センゼンをムナかけムナせ
トムナて黒田長政タカノリ久留米秀包ヒサカネ打連ヒキて都城小歸トシマツらムナきムナ南ミナ
大門の外碧蹄ヘキテイ鉞ムナ陣ムナせムナれムナりムナ廿六日の曙小本アサノ李如松リジョウが軍
押来オシキるムナ旌旗セイキを立ムナつムナ何十萬ナニとも測ハカるムナるムナ秀家を始
とムナく大軍ノアヘ野合アヘ合戦危アヘうムナん都城トシマツ又タテ楯タテ籠コらムナんと
いムナれムナ時立タテ花宗ハナノ茂目メを見知ミイりムナ刀の柄カサもムナ手テをムナ敵カのハ
とムナ勇イサまれムナるムナバムナ誰タレう先陣センゼンせんムナといムナふムナ隆景タカノリ吾先陣
せんムナとムナ兼カネくムナつムナ事コトは誰人タレヒトあムナれムナやムナひムナもムナよムナくムナばムナとムナて

初ハジメて陣センを進マめムナくムナ士大将シテウシ栗屋アヤヤ四郎シロウを場村ウチノムラ上ウヘ陣セン心ココロ好ヨク掃ハキき
三千サンゼン計ケイをムナめムナきムナさムナんムナで相戦アヒふムナ立花タテハナ宗茂ムネシゲ久留米ヒサカネ秀包ヒサカネ毛利モリ元
康ヤス六千ムサシ餘ヒト奇兵キヘイとムナりムナ右ミダの方カタ三町サンチヨウ餘ヒトり小陣コセンせムナ横ヨコ振フりムナか
隆景タカノリ旗本ハタモト一ヒト方カタ陣センを率ソツして一文字ヒトモジは切キりムナ樹キりムナ忽トキ敵トクを討破ウチ
首カブ数カズ多オホ得エらムナまムナりムナ宗茂ムネシゲ取ツりムナ首カブ一ヒト鞆タヌの四方シホカタは付隆
系ケイの方カタは来キらムナまムナりムナもムナんムナてムナ敢カウむムナ名ナ年ネンはムナいムナとムナいムナまムナりムナバ
字ジ茂シゲ毎マもムナ仕シるムナてムナとムナ答コタへムナりムナ此軍コノイクサいムナまムナりムナ始ハジらムナざムナりムナし
時トキ黒田クロダ長政チカシゲ唯一ヒト騎歩キボの士シ六ムサシ七シチ人ヒト召具メカグ隆景タカノリの旗本ハタモト
来キるムナ隆景タカノリよムナくムナとムナ来キるムナ先陣センゼンの栗屋アヤヤは力チカラを添ソへ
とムナまムナりムナ長政チカシゲ悦エツびムナの色面イロオモテはあムナらムナれムナてムナあムナりムナ先陣
小向コウをムナまムナりムナ殊コト小寒風コノフウをムナげムナ吹フきムナるムナまムナりムナ長政チカシゲ
十トウ千セン

錦帽子を被らまはし先陣よりておろしをぬり世に聞
えり水牛の曾比銃をメラまはしり隆景の軍兵ども是を
見て々此軍は勝なりと勇みりりや長政こそ一サ
吾才武勇をかぐ人よ信せり事なむくハあふりり
或説は漢南まで明の援兵大軍なりとぞえり諸將
定し吉川元春を先陣とに元春勇猛の名なきは
あり元春軍兵を後面よりて敵をえんせは敵近くなり
りり時士大将某焼飯を十をりりめち来りて時より
くのみきりりめされりといひ元春是を吾食し士大将二ッ
食しをゆりをを智の若ふとへりれども得くははとかや
敵合二町身はぬりり時元春下知りて二町身向直りきりり

を突かり敵を追崩して頓て引取まはしりとりり
目小敵の大軍は多き士卒氣を奪まはし崩れまはしり
と元春おひひくかくせられりりり是誠小味方の氣
を挫しめざる將畧あり元春ハ関西益々の勇將なる
誰う彼間まはまされども元春ハ朝鮮陣より前より死去
しは隆景かくせられりりりを傳へ誤りりりり
知べりりり

○南大門の軍小明比兵を追かけ秀家の士國富源右進とそ
剛此者大力たかりりりりりりやえにようりりり敵は追付く
二尺竹あり刀をえのべ三刀まき斬りてりりり甲堅くてりりり
負劣國富刀を捨飛かりりり組ぶる彼敵國富をえりり

押へきりりちのめかへきんとすしふ大磐石を撲中へしつらめり
國富脇差を抽て二刀きせといらるる甲みや少も通らぬ
巳子危くりし時味方數十人落合し敵をバ付取りり
○朝鮮より秀家を始都城に在し加藤清正とて行程
敷日を隔つ然將糧尽んとす時加藤遠江守光泰獨云
清正都城を放まて敵に向ふ人々都城を去る食小就んと
せん清正を捨殺まて今爰を去るりのハ復男子は交と
かつし清正を捨ん事日本の恥とて人々糧既尽とり
いとせんといわれり遠江ち怒り砂を喰んりのをとり
砂ハくもまてしを遠江に居丈高みぬ汝等砂を喰
ん捨よも志し我教ふべきとて福島正則をまるとん

いふ市松りつるのり小大船不成まを中とて又秀家お
今までハ中納言殿と敬ひ申せりさくふよりハ中納言めと
申せり清正を捨殺し恥を異國にさく人々たりといひ
まて座を立まて清正糧尽て都城より退き三里計の
近所小陣しきりと告来り遠江守ハ清正と生死を同
しせんともりしふまぬるまてり
○朝鮮の平安川ハ深サ八九尋四五石積の船此往來ありて
日本よてハハバ大川なるまて巴川の度さ然徳家此士或ハ七
八町十町或ハ十二三町ありしとて審たつて黒田長政は
士吉田六郎左衛門 推名六之介後まて 又助ハ子見積アと下知
せしるか後の事ハ慣しんゆゑ覺束たりし辭きれば父子

組小功者もまきとていひまきく羽之助又助組の士を引具し
川岸小出川は向小朝鮮人三人見えり又助小柳槍七長
きき老たり何の向は人退らざる内は急ぎ堤の上を歩け
指物をふる時踏もれと云合え槍七走り其苦くけ向の
人とひくくもれぬ指物を振りまきば立ちまきりぬ即
其間を打てれば八町五段なり長政家て又助二十一才
老功の若中も芳らとと称美せまきまき

○朝鮮きて何まきの平あてりまきん清正の陣大山の麓なり
くるる虎夜来まき馬を中引さげ虎落け上を飛び出け
里清正口傍き事ありと怒らまきくるる小姓上月左膳をも
虎来て喰殺せり清正夜明と山を巻巻て虎を殺し

一足の席生茂まき草原をかまきりけ清正を目かけて来り
清正大ある岩の上まき鉄炮を持福ふはる小其間二十
間計虎清正を睨とて立止る人鉄炮を揃く揃んとす
を清正下知しておせれば自お殺さんとの志あり斯く
席間近く揃り来り口を開きて飛りくるまきを殺しぬ
咽小折込事ればまき小候まき起上らんとせりまきも痛手
まきまき終る死しぬ

○清正於終りて大川は折捨と向の岸小船を繋ぎ陸小陣屋
まき旗を立てまきをまきりまきをまきりまきり後
まきハ敵はあまきまき誰かある水練の若あは船取まきと
下知まきり小果りて清正の言れまき又清正の陣取

糠ヌカのくくく馬ウマ秣シふくくくめをほこ藁ワラをふくく切キて豆マメを
くくく切キへといくくく馬ウマの力チカラ落オチざりて

○明ミンの援エン兵ヘイ大軍ダイケンきて朝鮮チヨウセンよ来キて日本ニッポンの軍イクサ危ヤブいと太閤タイカウ望ノゾみ
軍評定有イクサニシヤクモヤウし時蒲生氏郷進カニフウウヂサトむ出何ナニホド経トれ事コトういふべき氏郷ウヂサト心ココロ輕カサ
鮮センを賜タニはりいへば切取キリトリし打破ウチヤブるへ死シりぬをといふれ
くば太閤タイカウ是コレより氏々ウヂウヂの大志ダイシを思オモひ又同時降景タカゲ
使ツカヒを以もつ隆系リウケイが存ゾクびる亦ナラハ十ト万マン計ケイ軍兵渡海トカイせ六城ロクジョウ々々を
守モトらせ隆景先陣リウケイサキジンして明朝ミンシヨウよ押入オシイリ小京コウキョウを攻落セメガるべし此告ココト
す申マウていとつ秀吉小早川コバヤカハの智謀チボウさぞあはしく人々ヒト々よく
聞キきまうよ秀吉功コウを遂トぎて死シすとも秀次ヒデツネを大将ダイジョウとし
く明朝ミンシヨウよ攻入セウイラん時我魂魄ワガコンバウ雲クモ小乗コジョウとて鉄テツの盾タシロをつき唐モロ

土ツチの奴系ヌケイを一ヒトとよ遊ユころしと捨スチなんものをむりも柘榴シロを
啖カミく火ヒとなせし老オシのまゝとつ其小男コヲトコの名ナを忘ワスれり
いふまゝつらば施薬院セヤクオン秀成夫ヒデナリハ小野コノ比ヒ天神テニジンれ事コトうてい
ち秀吉ヒデタカそれぞり雷カミナリ小なりと天テニよ上ノボりと言イハ傳ツタへ
ど吾陰囊ワカキンロウの垢アケむもあゝぬ物をと大音ダイオンいふまゝを
聞キ人ヒトごやふ小驚オドロきまゝり

○黒田長政クロダナガサダ朝鮮チヨウセンの全義館ゼンギカン陣ジンをいれふあゝ俄アハ俄アハ騒さわぎ
くれバ敵夜討ヨウチみやあせむと井セイ楼ロウよ上ホらまう小虎馬コトラウマ屋ヤふ
入イりてあてぞ有アりて恐オソまて知チる者モノも毎ナ日ニふ菅政利カネサダ
刀ヤを提ヒてまて向ムカふ虎咆コウバウかゝる如トを飛トビ遠トホへく腰骨コシボネを折ヲく
斬キ付ツケりり席前トラマヘ是コトよて立タあがり愈イ猛マウアて危ヤブりりふふ

後藤基次ゴトウモトツグかけ来り肩先カササキを乳チの下タにけり切キはくまバ菅カン
得エしりやと席トラの眉間ミヅマを切割キリワツく殺コロしぬ長政ナガサダ汝等ニキハ先陣サキゼンの士
大おオホとして下知シタチする刃ヤをふケ獸ケモノと勇ユウを争アライふ事コトおホるハげハせ
とぞいイれレ々々政利セイリが刀ヤハ林羅山リンラサン銘メイを作ツクリく南山ナンサンと名付ナヅく
周慮シュリョ白額ハクガク虎コの故コト事ジたる銘メイ小曰コイハク

節ツメ彼南山ナンサン山惟カミ劍鉞ケンゼン苛政キセイ除去リ酷吏コクシ逃藏ニウサウ截邪セツジャ斬倭ツルニ
惟カミ刀ヤ在ナリ箱ヒツ惟カミ其言コト虎コ若シ有リ真偽マコト傳ツタ之ヲ萬世マンゼ為ニ子孫シソン常ト
朝鮮チョウセン機張キチヤウもく長政ナガサダ虎コ持ツせレれハ小虎コウコ一匹イツヒキ人の群ヒレる
申マウよハけレ来キる菅六カニ之ノ分ブンが足アシ狂キヤウの肩カタを唾カミく後ウシロ小擲コチケもハ
一人ヒトをも腕ウデを唾カミく投倒ナゲタマフしハるが六カニ之ノ分ブン其ノ日ヒ朱シユ具ク足ソクを
毛モウくくハや目メふハけレるハ忽クハチ飛トビかハるハも菅カニ二尺ニシツ三寸サンサウ

有アりハ刀ヤを抜ヒキく忽クハチ切伏キリセきり其ノ刀ヤ今イマ小菅カニの家イハに
持傳モチツクふ備前ビヅン吉次ヨシツクが作サクなりき大徳寺ダイトクジ春菴シュンアン和尚ヲシヤウ其ノ刀ヤは
斃ヘイ秦シンと名ナを付ツケり秦シンハ虎狼コウラウの國クニと云ヒふハ我ガを
羅山ラサン林子メイも銘メイを作ツクらハるハりト云フ一説イツセツあり

○文祿五年テウリクゴ朝鮮チョウセンより泗川シウケンより慶ケイよ城シヨウを接カニへル時トキ門脇モンワキの
狭間サマを垣見カキミ和泉イハ守家シウケ純ジュンあげく切キきとハ知チりハるハ長チヤウ
曾我部ソガベ元親モトチカ刃ヤを人の胸ムネあハりハりハ腰コシちハりハを當アチて切キ
くくくクククよハきハことハ和泉イハち下サげハくハ敵城テキシヨウ内ウチを覗ウカミへ
きハとハ元親モトチカ此門コノカドへ押寄オシヨセ公キミよく内ウチをウかんハるハ小城コシヨウ兵ヘイよ
りハたハば一ヒト支サシもハさハるハや上アゲて切キバ敵カウの首ウタの上ウエを射イべハる
と笑ソウひハるハと我ガ

○慶長二年朝鮮の番兵船数百艘をかく島に置いて日本
の軍船を防ぐ諸將番船を急取べき評定あり加藤左馬助
嘉明目小僧大軍を小勢をりて争う打勝べきといふ事
しうひそく小手の者小下知一五人十人船を急番船のかふ
漕向ふ嘉明法を背く者どもを押留よして追々船をかされ
しうやゝもく我押止む六止らりと云推く船を急漕出
さく河合庄大夫同庄次郎萩野作右衛門かき急の三分五人
打乗る番船の中へ押入せり三分船八何事と問正中の
本船を著よと下知一やぐて乗移る敵其勢ひは恐ま船
底へ入て剣を抜鎌を搦て待けりし嘉明おもたぬ
らそ飛込せりバ従者などりハ残るべき續て飛入る

なで切しして本船を乗取せり諸將も追後し船を
押出し来る既よ鉄炮の葉も火移り焼船を急せり老多し
河合庄次郎ハ十六才なりが飛入りて海に飛込溺死に佃次
希加藤七郎勝も功名せり嘉明一人の武勇小
く七月十六日白昼小押寄せ急船百二十艘一艘は五百人三
百人乗組を僅の士卒少く悉く海に切沈めしハ古
今稀なる事どもり秀吉感状を与へ六万二千石増禄
し十萬石を賜へらる池田家の長臣池田河内が妻ハ嘉明
の女少く河内が男伊賀ハ外孫なり伊賀若死に時外祖父
武功せりを尋ねれば今年老てるらるる皆忘る
しうとのしりひく止めかき島の船軍せりと問小十五

才なる小姓の船に乗移る時矢小中と海に落て死しうら
不便のありなりと只此事を後うく他は及ぶ事なき

○太閤名護屋小治り朝舞の軍をめぐりしめを怒り

謀大將を集め今八条吉白ら押渡すべし三十万の軍勢を

三手あり利家氏郷は先陣させ三道より打破す真直

明彰は攻入るべし日本の事ハ徳川殿おとせば心よかり

ありいふやかりふと有れば東照宮より召利家氏

向をせむ人多き中より撰び出され一方の大おこ

事面目よくてくしく抑我亦弓矢をたて年寄いから

人の跡はかぎ残りしんハ口勝事なり必一方の先

を兼るべしと仰らるる不淺野彈正少弼長政をて

くハ殿下此年月の御振目しり替りしん古狐の入

替りしんと存るなりとヤも呆ねハ太閤大は怒りや秀吉

が心は狐の入替りしん所謂吃と申せ申損なバ首打落さん

りのをとりしん長政ちつとも騒り長政がぬ

何十人が首刎らるんも何条のぬべきそもくしん軍

起して朝鮮八道ハヤや及ぶ日本六十餘州ハ父を討せ兄

弟を失ひ夫は難き子ハ先立歎き悲しむ若満々しり

は兵糧の運送相加かり六十餘州の内意くおは形とたる今

獲向ひあるんハ五畿七道盜賊を起せん事必然あり徳

川殿いふとたりし争はを防ぎしめべき爰を思召て

先陣ハ伝らるん殿下むし此清心たるんハ是れ事の

かど御公付のあはれは是唯事よあはれとて一室古狐の入
替ア〜〜よみ鄙き人の何よ人〜〜むとす〜〜警ハ必人ふと
〜〜ハ此事よらと悼る所た〜〜放てバ太閤何おもせよ
主小斯雜言す〜〜奇怪あ〜〜とて飛〜〜らん〜〜
人々押隔〜〜り長政ハ〜〜ぬ体〜〜く〜〜ふ色代〜〜と
座を立〜〜陣所よ帰〜〜か〜〜所小肥後國よ逆徒一揆を企
つと〜〜え〜〜バ太閤大よ驚手長政を召〜〜出〜〜汝が嫡子左
大夫幸長罷向て切靜む〜〜と下知せ〜〜本多中務大輔
忠勝を添て肥後國へぞ向ら〜〜る

○朝鮮よ何きめ所れ事よや廣き形よ道ありて向ふら
山の禁あるふ大穴を構へ射手を伏せ〜〜行かる日本人

餘多射殺〜〜り黒田家の兵井口熊市が從者山崎喜藏
いで〜〜て見ア〜〜さんといひもあ〜〜れ走ア〜〜行井口も馬〜〜り下り
走入〜〜る巴山崎射よ三人斬伏る井口續て攻入追散よ井口思
賞よ〜〜らぬいばあ〜〜れ朱柄の鎗免〜〜さ〜〜と〜〜物〜〜るも
合〜〜く武功度重〜〜る或ハ一日の中小首七ツ〜〜え時ハ朱柄の鎗
も〜〜と〜〜と〜〜のれ〜〜輕〜〜く許〜〜し〜〜る事よや〜〜と〜〜井口
是を多〜〜共〜〜後一日小首七ツ〜〜えて朱柄の鎗〜〜と〜〜を〜〜り
○朝鮮よ清正全列よ在る時金山海よ〜〜十里餘りの程
日本の軍兵城々をち〜〜て七八里或ハ十里討よ〜〜て伴の城を設
け〜〜り清正を太閤呼ま〜〜つ〜〜バ日本よ歸〜〜ると〜〜てお〜〜ま〜〜さ〜〜る
戸田民部が輔高政密陽よ〜〜る〜〜清正と舊友〜〜なれば〜〜り

あはれべき用意して待まらば士大将真鍋五郎左衛門神谷
平右衛門を途中やで迎へて四里計かまはれ清正の先陣なる
其の以ハ四方よ敵たなく無事あり二人とも革羽織袴ひておる
小清正の軍兵皆物具して葷食付け旗をもちり立磨の間の
鉄炮五百挺真先小押く鉄炮は火繩をもちり火をつけ
しり清正ハ溜塗の物具銀比長鳥帽子の曹は鉄をもちり
頬當脚當して草鞋をもちり銀の九本馬蘭の印を自ら
背小さし月毛の馬小白泡かかせく来まらる二人馬より下
て迎へるを清正見ると民衆よりの迎はは老骨折ありま
くおれへ着陣せん殊外よ人と垢付ぬ風呂をもちり下
まで湯を賜りあはれをもちり此より疾ゆりて下され

と詞を熱らる二人兼りゆると馬に乗急ぎ歸りてかくと
り程たかく清正着陣せられ屏重門より入椽して民衆近
習の士二人あて清正のけしき馬藪をもちり旗籠りあは
れ清正椽小上らるるまはよりて草鞋の紐を解脚當の紐を解
く時清正腰に付し緋墨子の袋を座敷へ投入し
どろりとあはれ米三升計は味噌銀錢三百文入らるる
馬印をもちり細のけしき合是を能くもちり民衆敬慕す
十里近きよ敵もなかりといふたのちそとに清正のハ
大事と知たしそぞよれ由勢大敵といふるを我物具せ
身を安どしそはかりともたあはれハ皆悔しべし
身ハ若くも憐れあはれをもちり為よかくハせし萬一の事あり

ん時懈て事を仕候るたふバ今までの武功虚名よたふ
むゆを慮をバかうり凡上を字ぶ下として大將其お下ハ
大急るりのるバ常々陣法を嚴よする事よハ二人
の公下方民は通すさうやりの事の有よと答へられらると
○輕報より虎と象とを引來る象ハ柔馴のゆけられバ細
き綱より引けり虎ハ鉄の鎖と付左右より七八人取付
く引來る朝鮮渡海の諸お一旦名護屋は歸集られ
時彼虎は大力ハ男あまう左右小鎖をひくどんとつて
かけし一幾らも並居さう中を通るよ人よあはれ
く清正膝立直一拳を握ア臂を強く席をきん
ゆきれし席もあざり立とやりて清正をみくしてお

○慶長二年二月清正あひ朝鮮は渡りまう船の急るや
を小地より寒風烈し土民ども土穴を穿ちく其中小
住居し日本の軍兵押海さう逃さるハ清正の急
土穴に入らむと清正漫小民を殺さば非道を嚴よ戒
うを後ハ商人も物を馬は付く來賣し小寒氣ハの外に
甚し馬の毛ははら下りかめきて鳴る声
土穴の中よあまうさうや王元美が詩ハ風劈面疑裂凍
粘髪此有聲とつてあひ合されぬ軍兵ハ昼ハ終日風砂の

中よ立夜ハ土穴ニ卧しんるる皆雀目よ放しんと土民教く
鳶を食して愈りんとぞ

○朝鮮もて何まきの如北戦もや清正の士大将本林本義大夫
流矢の臂を射せしり形も如よ庄林隼人馳來るをんて
いふも負しり此矢抜て多しきしり庄林馬より下く
抜く推もハ本林本さても快き事うれといひもあへば馬よ
ひくくおき一鞭おくつとかけ出り庄林後續うれよ
と云捨く敵も逆首を得しり二人とも清正の士大将大別
の老あり本林中が鎗ハ白鳥毛を鞘と一庄林ハ思も毛ぬ
以く鞘と一世人の人黒鳥毛白鳥毛といひしり
○輕報より徳將連判の事を太閤小奉り時清正の花押は

は筆畫かきありやひまわりく福嶋正則冷笑ひく
病重くなりく透言の時北状ありくんとといひしり
清正我ハさハ存せし戦場ハ屍をけしりもききとあり逃て
褥の上よ死んとハせし設けむいさきハ遺言状何んぞ
きとらられしは正則詞かきしり

○晋州の城を攻らるる時黒田長政の士大将後藤又兵衛
基次龜の甲とり車を作しおきり厚板は箱を持へ肉
は強き切梁を設け石を落しかけも箱の摧けむを
手當を箱の内へ後藤入る捧の棹を指車を箱よ
仕つけ進退自由よ廻る松あり城邊へ押詰石垣を崩し
く身入り

○慶長二年日本の軍復渡海一黒田長政の先陣栗山備
後利安後藤又兵衛基次衣笠因幡母里但馬黒田宗
右衛門以下三千計和寧館豊長家譜陣せしむる不明の援
兵押寄る其より長政は告よとて書簡をまゝとて利安
見て敵かりりる早急を救はせりといふ詞やある書改め
よ敵押寄せり先陣ハ少も心を勞せしむる事なむべし
むとて中をたれとて直させしむる告よりとて斯く敵
寄来まじハ利安先陣して打破しり長政関とひくく
折出くめみおとんでかけ来らまじよ敵早護龍臺をさ
しく敗れしとて先利安が陣所に入し何とて軍を
しりやといひも終らぬ不利安目を見出し押寄る敵は待退

まじ事やいと申し長政汝等討死せば我生がひありと思
ひくかくハいひしり何とて疾告来らまじやといひまじ
しりバ傍より告よとて書簡の詞を書改るとして遅う死
と申し利安夫ハ臣が改めさせしむ子細ハ志ありありきと
へ疾救はせりといふも行程隔りしれば毎益かり敵は
四方討もいれん味方必死を思ひ定て軍まゝとておくれき
とて屍を異國の野系よさらしとて名ハ後の世に傳はる
ん黒田が先陣の剛也者ども大敵に取巻まじ潔く討死
志しりと言ひしり又やく救はせりといふと申さんよハ後日よ
黒田が者ども主君の援ひを待りし皆お殺されしりといふ不
笑はるべし是日本の武名を穢はるべし

ハかりあも名こそ惜く久具ハ今生の暇乞とありて告奉
る書簡跡文は改め申すこと申されバ長政大は悦なれども
○利安若き時ハ善人といひ中臣ハ四郎言衛といひ長政は
筑前を賜りて時名嶋の城は長政居く左右良の城は利
安を置きしなり 禄一万五千石極めく儉ある人なり人の
衣服は羨麗あるをんてハ褻晴といひその有といひ教
又價高く馬を購ふ者あまきバさざりりの馬も二疋の用
をバたさず何とて無益の費すことと戒めたりされども
幸に修く金銀を懐むのかれ一從者をいささく憐
貧乏を助る事尋常なり大不踰よされり
日根野備中守朝能は使としてゆり時黒田如水は銀

をかり歸りて後如水のちやま行し不如水近習の士は
先人の贈り鯛を三ツありてその骨を煮ててを
しゆるといひしを各番の甚しき事よとあり居り
て頼る者を知り酒宴ありて後彼借し銀百枚取出
しをせし不如水より返りしなりとのをいひて
かゝるに異國は渡らるるより海を渡りて送る
るにせしなりとて受取しめて止め栗山も如水の
風よたうしひきりしや君臣ともは頼母しき事ぞり
栗山の戒をもちて惣く世のみををんてふ士といひ
人此体こそ毎下よりくらをりて多くハ美衣を乞ふ
て明暮酒宴しり馬具武具やりの抱いり有やらん

あつた多くハ商家ニ典當一或ハ茶の湯よとして古び
かたじけなく器の何れ用もなき物ニ數金を費し博奕とそ
あつた戲は夜を明し斯むく無二よりひかきく
人の黄金を奪ひく其人の赤鯉よなきも顧む是ハそ
も盜賊の如きも劣アとして事なるべし扱物が
アすすをば多くハ女色の事ハふれしものよして禮
義廉恥ハあつたりもあつたり又或ハ儉約よことよせて
利倍の事よハ錐刀の末も争ひ人を欺きて已が得
あつた事を願ひ或ハ奢侈よぬく用度よ苦し
み商人よ向て首をたき其人の思を得て金銀をかり
是を取もせし明をさまハ從者あつて召具し我ハ

門地の志ありたりとて途中よて人をいうたつ
追拂りの家人を飢しめて購ひし價をやくと大
國の君も亦たうと斯の如し不仁不義の行をなして
世の人ハ讒笑も知らず世界ハ皆かきあつたと思ふが
風俗の衰へ毎下よ口惜き事なり

備前 湯淺新兵衛元禎

編輯

同藩

平野太郎左衛門敬邁
赤木益吉周憲

校訂

弘化四年丁未五月

京都

勝村治右衛門

大坂

秋田屋太右衛門

發行書林

江戸

須原屋茂兵衛

病家須知

擇善居主人著

此書初小養生の要務を説き一切の病小薬を用ひて唯常の心掛にて治すべき事を示し医者の駈け音病の心得食物の善悪小児の育方瘡癩の用意懐妊の事當りて都て懇切小書著せり有益の旨あり

養生訣

右同著

此書ハいとも行ひ易き養生の方を記し人をして毎病長命の道に導きしむる也

武雜記補註

伊勢守平貞孝主著

裔孫貞丈先生註
長澤伴雄先生補

此書ハ伊勢守貞孝朝臣の抄録を以てしつゝ室町將軍家の儀式諸制度の由来且用ひ損きども奉らまじしを裔孫貞丈先生細注を以てしつゝ其形状を摸して書きたり此度長澤伴雄先生三書本を校合し

